

武林名譽錄

翰

三三四七〇

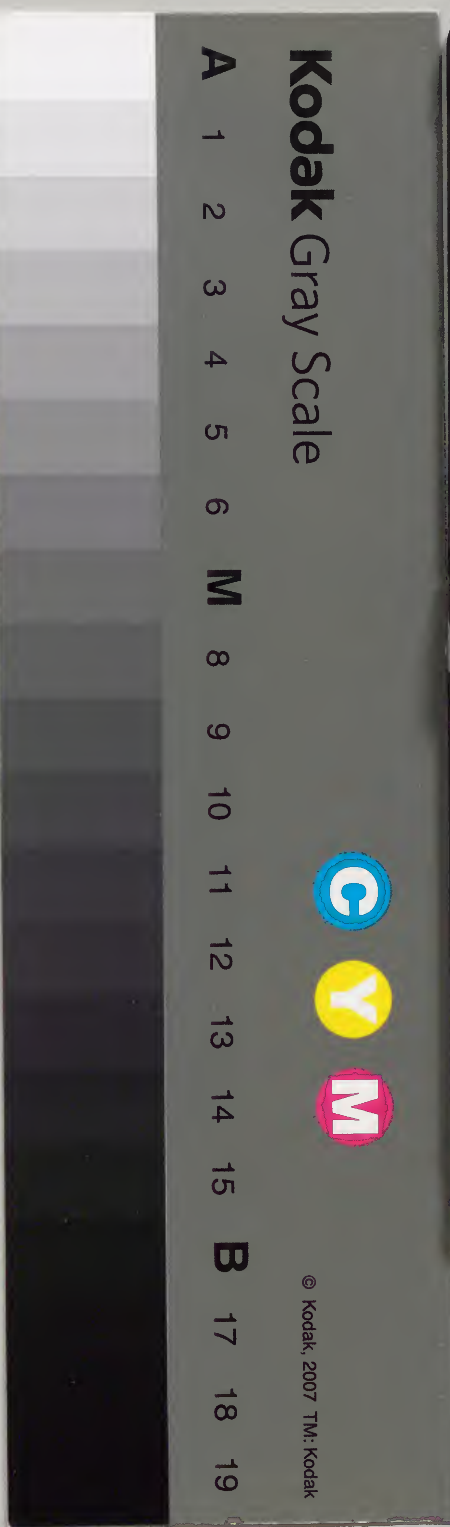
庫	文	閣	內
一七〇	函	五	冊
三三四七〇	號	五	冊
和	書	類	類

和	書
三三四七〇	號

第一

德川家達獻本

內閣文庫	
番號	和 34470
冊數	5 (1)
函號	170 36





柳菴栗原信充編

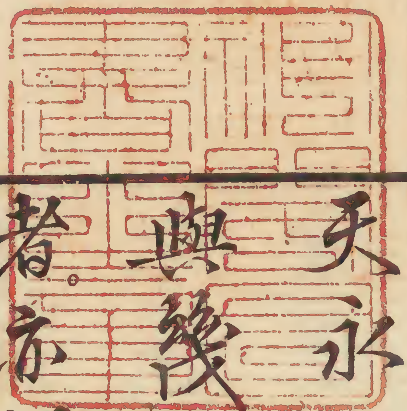
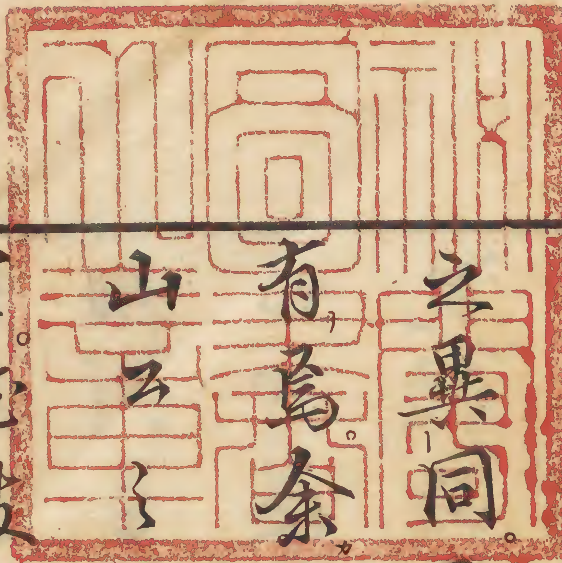
初帙五冊

武林名譽錄

東都書林

知新堂發兌

天永以降。慶元以上。講武譚兵者。其
 與幾何。然其所謂美之溢者。惡之溢
 者。亦頗多矣。或時月之差錯。或名字
 之異同。主客殊辭。事實胡越也者。亦
 有焉。余家金吾君諱昌晴。以武田掾
 山云々。姑夫相從。戰於信列時甲能
 軍。旋被創。歸卒於家。其男親衛君諱



詮冬亦以其甲從於機山。戰死於
相列之增。其子金吾君信盛。元和
乙卯。從軍於浪華。以創免歸。以故不
見錄。終於家。父子三世。以兵從事。然
身死而名不稱。祿不及。為憾也。大矣。
少有家錄者。則乖違混雜。為余志在
錄。乃祖之勤勞。以傳於家。辛苦。以從

鉛。斬。摺。撰。抄。集。漸。成。帙。餘。力。編。此。書。
自謂美不溢。惡不溢。既得其實矣。但
恐著述無次序。全類雜。并。鑿。之。亦
可惜也。故一校。以刻於家塾。云

弘化第三年。上元。四萬六千三十八
回。丙午歲。正月。甲斐源氏。栗原信光
操。觚於紅梅坂。東。妙龍泉。畔。御柳園。

中。隨求書洞。

武林名譽錄卷之一目錄

志津しづ嶽たけ蟬せみ江え西にし處ところ乃なり軍いん以い評ひやう

江村えむら專せん齋さいと七しち木き鐘かね乃なり年ねん終しゆう

蒲生うぶう氏うぢ郷ちゆう會かい津しん小せう主しゆ大だい分ぶん説せつ

細川ほそがわ忠ちゆう興きゆう西せい國こくをを度ど教きやうせせととと

大岡おほおか氏うぢ郷ちゆう問もん答たふ

氏うぢ郷ちゆう山さん崎さき右みぎ系けいをを問もん答たふ

丹羽にひ又また郎らう左ひだり衛ゑい門もん尉ゑい長ちやう重ちゆう伊い左ひだり正まさ宗むね郷ちゆう問もん答たふ

加藤かとう左ひだり馬ま助すけ志し明めい會かい津しん小せう主しゆ大だい分ぶん年ねん終しゆう

伊い左ひだり正まさ宗むね郷ちゆう片ぺん倉くら小せう十じゆう郎らう問もん答たふ

江え村むら三さん郎らう兵へい衛ゑい朝あさ比ひ奈な某なにか問もん答たふ

直江山城守兼後金銭を扇ふく受て活

金銭乃始 信長公金銀銭を持てし

島原陣を真田信幸評されし

忽城攻の事

牧原常陸を實盛と縁せし

糧乃下り直垂を省せし

二本松義継伊達輝宗を擒先し

伊達乃中間血刃を研し

古田甚肉の妻の事

間登甚右落の事

武林名譽録卷之一 目録終

武林名譽録卷之一

栗原信充 著

一志津の嶽乃軍を太閤一代の勝事鱗江乃軍の

東照宮御一世の勝事おと太閤の其時岐阜に在り

久間玄蕃中川瀬兵衛を攻ふを聞飯を喫を待て

志をゆく途中百姓を粥を焚く

東照宮を敵瀧川左近一益伊勢蟹江乃城に取籠る

乃注進を切せらる浴に在ませし浴衣を著る

ら馬をおくおふ跡に隨ひ行者井伊兵部をかじ

瀧川舟より上る軍兵と由秘藏乃小姓なると

あはし

東照宮の軍兵と申既子急せむ舟中乃精兵多
く討ふ左近終る兵を城に引保ひて能くおけさせ
里とせ 老人雜話

今按志津嶽乃軍を天正十一年四月廿一日乃
事ふしと老人雜話乃作者江村專齋十九歳乃時之
蟬江乃戦を天正十二年六月廿二日乃事之專齋廿
歳乃時ふ當る聞見と申了誤あふらひら以と云共
事實ふ於く暗記乃失ふいと云難く姑奮史了依り
天正十一年太閤は十七歳いよぐ後五位下ふく左
近衛権少将兼筑前守た是美濃國厚見郡岐阜城ハ
此時總見院右府 信長乃三男織田三七信孝乃居城

也信孝龍川一益柴田勝家と合従し秀吉乃約束
ふ叛く申秀吉乃居城江別坂田郡長濱へ往進あは
て四月十七日早天ふ長濱を發足有る濃列安八郡
大垣城ふ著せらぬ此路小谷後川関原垂井を經く
大垣まゝ九里入遠く大垣より岐阜まゝ虎渡呂久
長良乃之大河を渡り五里了近く十九日岐阜入守
攻らぬへき用意有る十八日乃夜半より大雨降
しか其日延引せらぬ廿日午刻より志津嶽へ仇久
間玄蕃打出申注進ありしより秀吉足をたす
踏と踏鳴し柴田一類しと誅罰の時今ふ當れり
是天の恵ありと打笑大垣を打三ふ其路程十五

里形里夜不入乃色及在家中より明松方不程出
宿々子粥を出し以て天下御安堵乃上廉御褒美
可有と觸ら色一程小在家の者共燈一出不万燈
如し續松乃明里子程おく志津乃嶽乃近邊子着陣
夜明家を待ゆの木の本をまぐは乃暗さ小押出
賤乃嶽乃南乃旗をたぐ玄蕃の陣へ弓鉄炮を打掛
馳る近習乃者共鐘をへよとあ里一か及加後虎
之助清心 廿二 一番鐘と名乗る拜郷五左衛門乃平
乃鉄炮頭戸波隼人を突伏く首を取福島市松正則
廿三 加後孫六嘉明 廿一 糟屋助左衛門尉某 廿四 平
野権平長泰殿坂甚内安治片桐助作直盛相續る鐘

廿一ノ二

を入遂小玄蕃を追落し廿二日越前府中へ打入廿
三日北庄を攻破里廿四日勝家腹切く失敗行年又
十七歳是小於く秀吉乃威武初く強大不至る然也
共秀吉乃勝を得ら色一飯を喫ま教を待り教改
りあら以玄蕃り秀吉濃列發向去く信孝と合戦り
及小信孝と主乃子お里誰り叛逆乃秀吉小與力を
へ手岐阜へ名城お里秀吉勇敢お里と小容易落し
得へるおあら以今其留守を時とく志津乃嶽を
追破里其勢を以て長濱を攻取んと計也おを知
か及勝家り首おく信孝の後たおを察知せし
か及連上軍を旋されし般里孫子小彼を知己を知

ハ百戦路から以て云道理よく引返さばし於里飯
を喫む其間由猶豫をへり以て急ふ馳歸したる
其孫子ハ其備ふを攻其不意了出よと云ふ京川
か邊しと聞え大早次ハ蟹江乃城と云ハ尾列海東
郡蟬江子あり佐久間駿河守正勝織田信雄乃為ふ
守る處あり然ふ了信雄管生ハ要害を捕ハ正勝を
遣わし監軍たらしむ正勝母方乃叔父前田與十
郎を留る蟬江を守らしむ時ハ瀧川一益前田を説
く秀吉ハ屬せよと云前田信雄ハ叛く天正十二年
六月十七日夜瀧川を城子引ハ大早此事清洲ハ聞
えしハ及信雄と共ハ兵を出さば十八日前田城を

取十九日下市場城を圍くハ鬼長兵衛を生捕瀧川
ハ馬印を奪ハ得失里廿二日蟹江乃城を圍之二三
丸を攻破里本丸ハ距る廿九日瀧川津田返三郎を
出さし降を請七月三日前田與十郎を斬る瀧川蟹
江を去家忠日記云同記豊長秀吉瀧川を援んる為
大垣を打出らばし瀧川ハ退去を聞く兵を収め
て京ハ歸里遂ハ親親を議せらばしハ蟹江乃軍
を以て信雄乃為ハ秀吉と弓矢を執せハ義兵乃
後と稱し奉るへき也
又云此ハ系專齋ハ親しく聞見せし時乃事ハハ有
とハ筆を取ハ元禄三年乃後と知る也ハ既了之

曰十年前乃と入係る暗記傳因乃誤か共云へり
以然らハ數部校定せし事實を主とて單ふ一時
乃談話久錯らるるを云ふ也

一天正十八年秀吉公小田原を所退治ありて直ハ奥羽
へ下向七月十日日白川へ所入長深ハ止宿ある此時
松坂少將蒲生氏郷ハ供奉成八月乃至之政宗押領
乃會津の城を召上らせ本村伊勢多秀俊を以て受取
せらる同十七日ハ民郷を内書院へ召出さ當城を預
らあし間領地乃てハ代々會津へ付たか如く子如く
相違あるへり以て越後國小川本仙道ハ郡會津郡
高口十二万石其時白川城ハ民郷へ附らせたる也

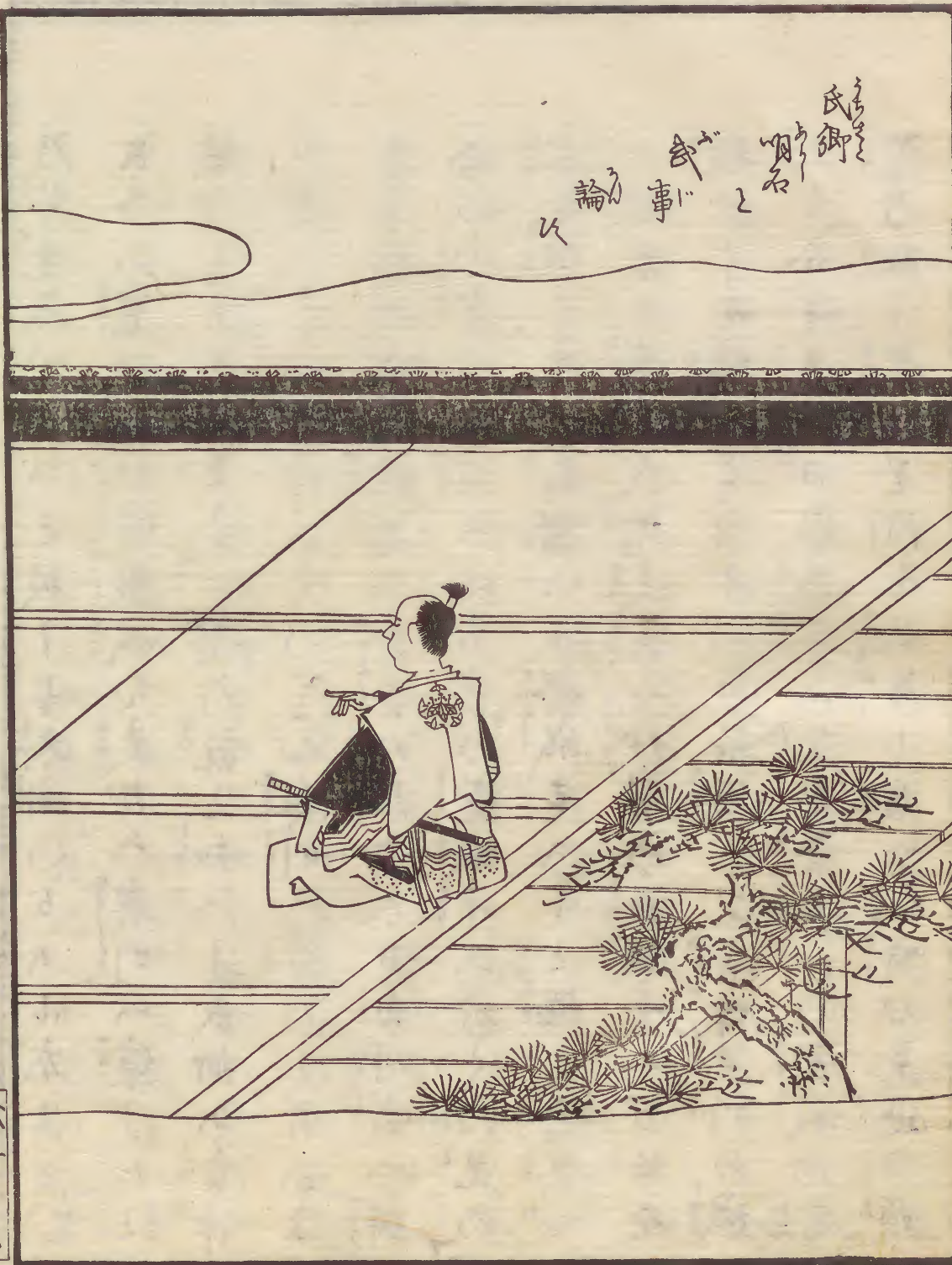
右長衛尉一政を置きり白川故事考

今按ハ蒲生氏郷天正十八年ハ三十五歳なり勢別
松島十萬石を奉領合せ十八萬石を知行せし
り是より至く曰十二萬石と成る但此事實一定せ
る太閤長岡越中も忠興時ハ廿を會津ハ展しめん
と有るハ忠興云く政事乃為かれば命乃任なり若
息賞失らハ小倉里共西國に居んと請中せしハ依
會津領乃内大沼河原稲川耶摩猪苗代南山六郡松
道あり白川石川岩瀬安積二本松等又郡曰十二萬
石蒲生飛騨守子與ハ錢太平記ハ八と家忠日記ハ
見也武家高松江村專齋以年廿六歳あり其記せし

處を見ふ太閤諸將を會し宣入る會津の関東
八利乃要地勝也大將を置る鎮めざる能くぬ
地あり各遠慮なく所存を書付く見せしと云細
川越中尚然かへしと云人十人より八人なり太閤
披見く汝等愚昧甚し我天下を容易とるを理なり
此地を蒲生忠三郎おらるる置へき者かしと云忠
三郎氏郷のを置老人とあり忠興此の時丹後田邊城
三万石を領せしなり又武功實録より氏郷を奥
州へ被遣ひしと云太閤將を以脱ひし氏郷へ着らむ
氏郷將を御自分より召ひし物氏郷奥州へ被遣ひ事
の氏郷いづく存ひしと御尋被成ひしと傍の元符

五ノ一

乃外迷惑かりしと被上る太閤いりし由尤あるは
あちお置ひし怖敷奴を更け奥州へ遣ししと
被仰とあふるまゝ一轉乃説と知へし氏郷は會津
を興へし會津ありしと云奥州へ遣ひしとあふま
志を折る又落穂集ふ秀吉八月十日白川城へ歸
給ひ今宵は明月ありし由あむは當城中に於て月見乃
宴を催さむ大名諸士由登城をへしと觸らむ其日
の晩方お蒲生氏郷吏を伊勢乃松坂十二万石を
領せしを轉しし十二万石賜を里會津黒川の城
主とあせり其日乃薄暮ふ至り各出仕乃刻氏郷書
院乃柱る寄掛里月を詠居し處へは時亦多進日頃



氏郷といふ入魂おとせの側近く居身く今日ハ大身く
取立らせ御手柄おとせの中せしお氏郷由あへん
中せらるゝ如く大身おは成たせと由言早代氏郷を
弄たし奥刃乃田舎者お成るゝとの返答故ハ終始
一途乃面く氏郷乃大器の程を校量せしと見
ゆ祖氏郷を會津の主とおせしを白川城おて乃
之お非を會津おく乃を之文氏郷お誘へ乃返答由
一書おハ代氏郷由弄たし如是乃人數を扱入から
ハ太刀打由成中一番鐘由入らせ以と云しと云
落徳集乃説よ里雄烈おしと意氣凛々たしと云へ
之於記者乃文質お依道理乃隱顯明暗同一から

以童蒙乃為おあせを概入おく故く冗長を思ふ以
まゝく了嗽々せ
一丹羽五郎左衛門尉長重白川く屏せし時伊達正宗立
よらせけおを度々おりし。或時酒宴乃うへおと正
宗中せせけおはか後充馬助と貴様と奥羽の押城乃
由おひぬ共數万乃勢おく我等押通しおとちと難
儀いゝせおへしと中せせしおは長重換扱おいりし
お勢お里共貴様正宗乃旗中へ突崩しおと。乃其
のそとは御通く被成かくからんと申。互々大笑お里
けおとせ。白川故事考
今按お丹羽宰相長重ハ越前守長秀乃長子お寛

語不見之、久其入、乃手柄、乃程、乃知、乃大、乃但、乃
以乃答、乃史、乃記、乃蕭、乃相、乃國、乃世、乃家、乃獵、乃追、乃獸、乃鬼、乃殺
者、乃狗、乃亦、乃獸、乃處、乃指、乃示、乃者、乃人、乃也、乃被、乃堅、乃銳、乃執、乃多、乃
百、乃餘、乃戰、乃少、乃之、乃數、乃十、乃令、乃徒、乃よ、乃く、乃是、乃獸、乃を、乃得、乃の、乃之、乃功、乃ハ、乃狗
亦、乃里、乃蕭、乃何、乃如、乃之、乃ハ、乃指、乃示、乃功、乃人、乃也、乃漢、乃高、乃祖、乃乃、乃諸、乃功、乃長
子、乃誥、乃ら、乃也、乃一、乃と、乃一、乃轍、乃ら、乃也、乃詞、乃乃、乃緩、乃急、乃を、乃分、乃か、乃了、乃勝、乃也
里、乃と、乃云、乃へ、乃

金錢乃初、頃伊達政宗金錢を懐中し、諸大名列
座の初、出、皆く不見、是、新、新、新、末、座、了、景、勝、家、老、直
江、山、城、守、兵、兵、政、宗、金、錢、を、山、城、守、前、へ、持、参、し、珍、愛、物
亦、里、と、く、見、さ、る、山、城、守、扇、を、扱、一、間、ハ、乃、け、せ、れ、り、と、

羽子をひく、扱、入、し、く、打、返、り、く、之、亦、政、宗、乃、ハ、ハ、我
隨身物、扱、入、し、礼、儀、久、く、手、入、し、ら、以、と、心、的、城、列、苦、や、く
生、以、留、子、亦、能、見、以、へ、と、あり、山、城、守、中、ハ、我、等、事、ハ
謙、信、側、み、く、仕、を、也、一、手、乃、大、將、を、中、付、兵、今、景、勝、家、亦
て、先、子、仕、未、配、を、取、以、て、子、亦、く、斯、扱、乃、罪、を、器、を、取、中、に、
乃、物、亦、く、以、故、扇、亦、く、受、中、以、と、苦、々、一、く、中、ハ、政、宗、赤
面、せ、ら、也、一、と、云、武、隱、叢、話

今、按、乃、伊、達、政、宗、卿、と、直、江、山、城、守、と、乃、面、會、天、正、十
八、年、後、亦、亦、一、の、論、亦、一、復、政、宗、卿、會、津、仙、道、を、削、ら
也、米、澤、三、十、万、石、を、賜、以、し、十九、年、十、月、中、く、葛、西
大、崎、亦、移、り、也、文、祿、元、年、朝、鮮、乃、事、起、也、一、時、正、宗、卿

上校景勝卿佐竹義宣朝臣南部信直等と共に京を
發し、各議屋に入赴くと家忠日記に見え、大正
此際乃とふ、正宗卿二十歳許の時、當世
景勝卿ハ丹九歳か、一但金錢、天平寶字二年
二月、鑄らば、開基勝寶を初とし、文祿元年より
八百三十餘年前、あ里近、ハ信長公、乃令銀錢を
陣中、入費せよ、入、勲功、乃諸士、了領賜、あ、け、中
館林、乃清水久三郎、傳、見、上、天子、乃勅定、ハ
依、治鑄、下、公卿、大臣、以下、之寶、乃布施、了、亮、ら
新、令銀錢、を、賤、し、物、と云、へ、さ、あ、以、兼續、以
理、を、知、さ、る、人、ハ、あ、以、正宗、卿、ハ、赤、而、を、へ、さ、ハ

あら、以、是、金銀、を、祿、資、と、利、を、計、る、ハ、賤、者、と、か、也
と、由、金銀、ハ、寶、貨、ハ、一、く、賤、者、へ、し、物、ハ、あ、ら、ぬ、理、を
辨、へ、さ、る、者、乃、妄、作、と、知、へ、し、

一 島原陣、乃、と、細川、越中守、了、真田、伊豆守、明、か、今、夜、
板倉、内膳、討、死、早速、ふ、之、以、ハ、さ、新、く、ハ、付、各、々、を、一
子、を、を、さ、す、ハ、只、扱、了、成、す、一、く、以、月、左、扱、了、ハ、得、ら、ぬ
也、伊豆、守、武、烈、思、乃、城、成、田、を、攻、た、か、時、人、數、勇、士、以、
下、知、を、聞、け、た、里、伊豆、守、陣、一、く、親、子、あ、乃、扱、か、ハ、
腰、拔、さ、り、を、撰、く、以、附、以、今、夜、不、勇、中、ハ、中、た、也、ハ、安
房、也、兼、輩、也、乃、何、を、不、知、事、を、云、去、年、を、く、れ、を、忘、た、か
故、なり、一、度、を、く、れ、ハ、三、年、ハ、う、せ、ぬ、者、と、中、以、今、夜

島原中内膳之討死人数之損之怖るる有る間
人数勇むまゝ子男を乞ふに其分別を以て越
へとの山古人物語良將達

今按不寛永十五年正月元日内膳正重男討死あり
是年真田伊豆守信幸行年七十三歳信列松代城主
細川越中守忠利朝臣是年又十三歳か川忠興入
道三齋七十七歳ありいまの現存を以て武列忍城攻
去天正十八年五月の事あり信幸女又歳源之郎
と称し前田利家上杉景勝毛利秀頼淺野長政等と
共了攻めあり父安房守昌幸四十七歳の時あり
去年を以てを以ては真田持乃吳桃乃城を北築

と争ひ一時乃を云ふかへ
一米津中納言致所内杉原常陸と中者其頃七十有餘
て覺の者あり出立は赤地乃錦乃直垂入白髪胸板子
ゆゑに利家子打鳥帽子乃兜子白き錦巻し出く是昔
乃実盛ふたう人外ありと陣中名を以て不中實盛と
その中中以て常陸嶋ありて景勝人数大坂勢と喰合
志刻継打を以て無類乃實盛かおと人々を養ら連中
事幸嶋若狭大坂物語

今按不米津中納言致とハ上杉景勝卿を云杉原常
陸との慶長三年景勝卿會津又郡仙道七郡伊達伝
主庄内佐渡百五十万石を領せし頃陸奥耶麻郡猪

苗代乃城至大里一か里當時軍装子制分る里一と

以常陸介乃意巧みく考知へ

一天正十二年乙酉十月八日二本松義継宮森へ系候あ

方義継が客座了着る至座下輝宗其下伊左衛門又郎

成實岡上形介政景着座と義継下小は二本松藩代乃

士高田内膳鹿子田永泉大槻中務三人召連り輝宗

義継座定く一礼あり互々無恙無事懸以く所候の仕

御盃の壽おと義継暇を乞く立也々也は輝宗市門送

子立玉の表座におく出出礼承以礼入義継土乃

上子小を突いりく以急意共辱存以侍云や否や飛

掛是輝宗の襟を左乃右乃みく扱右乃子不照忘を後

武一ノ十二

揚胸のこり突掛引立る其下細道みく西方は竹や

垣お里成實政景兩人巾御後五六間知と隔くお互に

へと巾御服を通るへ手扱巾お也おく義継は後者共

氣くん掛居しと相見へ成實政景を廻く走参り

輝宗と互に義継を中子急驚まかく去分を扱扱く五

六十人お従入中お守御源内膳は拵遊佐孫九郎を

扱方伊左衛門家乃者共去はいりおと周章騒ぐ打物五

あまの吹く所く左右を互巻何の思慮巾扱くだあ

さきく新さかまを扱る小凶宗卿其口を鷹野ふ以出

留置乃とお也は早打みく追く没を以依之拵留すり

由子悪人数と由了途中まく駈付け也共せん方扱く



一場の
漫語
二國
を
新
謬
を



正宗より其命と申す。齒を嚙あらしく生かす。和子
輝宗廟をあけく。味方を招き。高巖子宣入。換予さく。先
運命つさく。敵乃擒とあり。恥辱を万人乃前ふ。踐く。先
祖さく。乃名を下と。我を以て。父とさ。あま。さ。あ。り。也。皇。君
と思ふ。へう。く。親族。從者。ふ。か。也。て。今。正。父。乃。身。と
あり。何。乃。悲。き。と。あ。ら。ん。義。継。と。共。子。討。く。家。を。全
ま。へ。と。呼。と。申。す。は。正。宗。由。父。後。者。子。討。果。さん。と
を。悲。之。其。上。目。系。乃。敵。を。遁。し。河。武。隈。川。を。越。せ。二。本
松。乃。城。了。入。の。何。程。ふ。出。り。入。と。申。早。速。敵。を。討。ん。と。難
く。且。又。敵。城。へ。父。を。生。捕。也。憂。目。を。見。せ。申。さん。と。申。に
惜。す。次。弟。あり。進。退。爰。ふ。止。ま。せ。う。と。怒。也。御。服。を。脱。ぎ

を。浮。へ。牙。を。叩。き。拳。を。握。り。取。伊。家。乃。門。葉。兼。代。乃。諸
士。と。申。主。君。と。共。子。討。果。さん。事。流。石。了。難。義。お。れ。及。鬼
角。と。申。内。宮。森。上。高。田。さ。く。十。里。乃。乃。程。を。但。打。圍。ん
大。計。之。以。時。小。濱。より。馳。付。く。面。々。皆。武。具。ふ。く。相。從
人。高。田。より。河。武。隈。川。へ。僅。々。五。六。町。程。形。り。爰。ふ。く
輝。宗。丈。音。奉。以。川。を。敵。了。越。せ。せ。く。即。持。く。一。千。丈。事。之
我。敵。城。より。入。る。及。再。會。期。一。難。く。弓。箭。乃。家。ふ。生。也。く。ハ
命。を。輕。く。名。を。あ。げ。お。し。め。予。を。か。く。眼。系。の。敵。を
遁。し。家。了。醜。を。恥。を。付。く。事。あ。ま。へ。く。以。只。爰。ふ。く。一
人。由。滅。さ。し。打。果。さん。一。掛。也。や。申。乃。共。と。呼。と。申。ふ。人
と。申。君。臣。互。に。目。と。目。を。見。合。せ。申。ひ。け。家。を。全。如何。殿

月八日輝宗乃陣処宮森へ約へくと之出けるとき
正家乃中石大肌ぬきく二尺計の血精したる刀を
研くおたり側系系男を乃刀ハ何乃料ふとくそと
同彼中石今宵二本松を討たれり研そと答ふ以同
答を義継乃中間後述たふり同く是り着く義継了
かくと告義継も也を聞くとく出せ輝宗を捨ふせ
志か也鹿子細新泉輝宗乃服定丸奪ち荒井九郎馬
を引寄せハ輝宗を以て乗せ義継を乃後馬子のり
刀を首ふ押あくる二本松より急ぎけると形り
正家鷹遊より鞭を合せ駈りか殺ふ所武隈川
乃代方如系言同く追討せりと由追討ハ輝宗を

害せんと搦川ふふよ里鬼ふも角ふも父を敵の
ふりけ憂目を見せたらんよ里ハ我手小掛来て義
継ゆり苦ふ打んとく二川玉乃鉄炮あく南無八幡
大菩薩とぞ打ふけふ其玉あやまく以義継の後よ
里及流若子馬よ里去逆さゆり打おと以二本松乃
者と由是なるとくつ度子どつと抜つとく切く搦る
正家乃若若元来大勢あく押お老一と形也ハ八方
よ里多鉄炮を打かけ或は強長刀あく突伏切ふせ
攻立けふ不とよ二本松勢ハ一人も残ら以討也子
り其後正家ハ先父の空くと死骸を賜へり世
く見ると鉄炮あく打け不時義継若南たふ刀あく

差貫きと見えく其刀心元不ありて外側子立た
不夫乃切たふり之如多く古刀底ありと見也 奥丹 永慶
軍記云云如以説乃如くハ正宗乃中間説語く二
本和乃害んを生し遂に大倫を傷多ふ至不殆く
正宗乃本公義継を殺さしありさ於之ハ鷹野不
志あり知也たふ昔周乃文王姜里不囚也漢乃太公
楚不擒も也たふ周武王深高祖敵手不かけんよ
ハと謂く也也を殺さてせ以武王を以て是
を稱し高祖ハ和を約く是を還し余く後武王
牧野不捷高祖城下了勝正宗乃所為乃如く勇
武か孝子乃情あり以伊達乃長子よて時不

ありく古回甚内り妻の智不如以古回を美濃國郡
上乃人形り長久手乃軍不池田勝入と共不并死以
其妻勝入乃孫武花与利隆朝長了傳た利隆朝長
幼稚乃時城門乃邊に娘遊に和僧あり利隆朝長を
抱く一室不負る大勢也也を護りておとへ術を
あつ以時不古回の妻小袖一川を拵く和僧の例子
至り今も寒し以小袖を着せよりせく又あは
液し中へり也志く其子我ふか一と欺志
かは和僧利隆朝長を放ちけると形り 藩史別録
ふく乃と云ハ謀を早淡路を池田家不領せし
ハ慶長十八年なり以時利隆朝長廿七歳なり和僧
不抱るへ其理を述べ寝藉者を服せしとハ間野甚
のらひ

女衛門の辨小及ち以間野の白晝人斬る富家
 の女子の八歳を奪ひ家へ入戸を閉るは
 大狼藉者不向ひ只今御斬りの日比乃宿意ら
 乃喧嘩りと同日頃乃宿意と答ふ子糸忙り
 の志りと切味を由涉境あふましく練された
 刀不左乃肩先より右乃片腹まき背骨をこ
 目たふとかまき一刃あき死たりと見へ動擾の
 中ふとく免をゆき静々たふやう感へ入たふ
 と云く後貴教勇にあまふあせと由智の石足のと
 免へは其子細き日頃乃宿意とりひ白晝人まき街
 あり打果し一念も切りのち逃るへしと思ふか

武一ノ十八

免のら以命を棄らせく乃とからんはか子今そ乃
 女子を質不取也たふは暫く乃命をおしまきくと
 存し以是の人を斬たら者ありとく棒を以て取
 免にあふ子細を云隙かきまき女子を質不取
 時刻を移され以ふるへしと云時ふをよく察せら
 せたりと答へ問盤然ら其女子を救され以へ
 一人を斬たら以斯中以我等を斬むへと云は
 小御邊の希代乃辨士かふと云ひくま其女子を
 放ち潔く切腹せしか問盤あま色勇士やと褒
 志く介錯せしとけり
 武將感状抑義継輝宗を殺せ
 記ふ也
 むら為ふ伊在家へ来りしあふ以た、正宗の意



念を猜ねんのうごくて釋宗しやくしゆうを質しちとせしし形かたちをし實じつのしやくしゆう釋宗しやくしゆう
を害がいせんとおらば刀かたなを頭かぶふあら去さへんや他た
一刀いちの斬害ざんがいをへしし殺ころふは是こゝを磨こくは乃のハ
其意そのい決けつして殺ころふは伊い家け乃の急いそに臨りんくは深ふか
く計からし久倫くじゆんを傷やむいと惜おむはと云いふ

武林名譽錄卷之一終



紙數貳拾貳枚

